

お母さんの手料理と風土を楽しむ農泊

— 伊豆沼農産の取組み(宮城県登米市) —

農林水産政策研究所 農業・農村領域 研究員 佐藤彩生

農泊は、伝統的な生活体験や農山漁村地域の人々との交流を楽しむといった、農山漁村での滞在型旅行を地域で推進する取組みであり、農林水産省主導の下、全国で展開している。同省の農山漁村振興交付金(農泊推進対策)事業に採択された地域では、試行錯誤しながらこれに取り組んでいる最中であり、誘客のために魅力ある体験を提供することが課題の一つとなっている。本稿では、宮城県登米市新田地区で農泊に取り組む(有)伊豆沼農産を紹介する。

1 農泊の取組み背景

伊豆沼農産は1988年に創業し、伊達の純粹赤豚といったブランド豚の飼育や水稲・果樹の生産をはじめ、食肉販売やハム・ソーセージ等食肉製品販売およびレストランや農産物直売所、食農体験ファームなど多角的な経営^(注1)を行っている。2003年から食農体験を提供しており、地域の食材を生かしたウインナーや郷土料理のはっと汁、いちご大福づくりなどの体験教室を開催している。17年の体験者数は3,000人近くに上るが、人件費等が負担となり、他の事業に比べて収益性が劣ることが以前からの課題であった。

同法人は食農体験を提供しているおおむら夢ファームシュシュ等6つの団体と(株)ブランド総合研究所で構成される「食農体験ネットワーク」に加盟しており、食農体験の提供における課題の共有や意見交換を行うなかで、地域に滞在する旅行者を増やすことに解決策を見いだした。地域により長く滞在してもらうことで、体験者数を増やすだけでなく、農産物直売所での買い物やレストランでの飲食

の機会を生みだし、収益拡大につなげていきたいと考えるようになった。

17年には、伊豆沼農産、ブランド総合研究所、登米市で「食農体験ネットワーク登米協議会」を設立し、農山漁村振興交付金(農泊推進対策)事業を活用して、滞在者を増やすための農泊の取組みを本格化させていった。

2 風土フットパス

滞在者を増やすためのコンテンツとして注目したのは、新田地区ののどかな田園風景や家庭で普段食べられているお母さんの自慢の手料理といった、地域から持ち出すことのできない資源であった。同地区には、ラムサール条約登録湿地の伊豆沼があり、水辺の多様な生き物が生息しているほか、夏にハスの花が一面に広がり、冬にはハクチョウやマガンが飛来するなど四季を通じて自然を楽しむことができる。

同法人は、新田地区に古くから継承されてきた知恵や技術、はっと汁などの郷土料理、神社など地域に眠る資源を再発見する活動を「新田あるもの探しの会」(06年活動開始)と共に行ってきた。新田地区活性化協議会の事務局として、15年に地域のお母さんたちが腕を振るった100品の手料理を展示するお祭りを公民館で開催し、その手料理のレシピを冊子にまとめるなど、家庭で引き継がれてきた味を地域の人と共有し、残していくことに貢献してきた。

地域の人がいつも見ている景色や食べているものを地域外の人にも楽しんでもらおうと考案された体験が「風土フットパス」であった。伊豆沼周辺を地元ガイドが案内し、参加



写真1 風土フットパスの様子(伊豆沼農産提供)

者は木漏れ日や風を感じながら自然ゆたかな風景を満喫し、途中休憩では農家の軒先でお茶や自家製漬物、手作りのおやつを食べながら住民とのおしゃべりを楽しむ行程となっている(写真1、2)。

最少催行数を5人(最大14人)とし、2時間ほどのコースで体験料は1人あたり2,000円(団体は1,500円)としている。体験料の一部をもてなしてくれた住民に還元し、小遣いに充ててもらうとともに、地域外の人との交流が住民の楽しみとなることに期待している。

3 農泊の担い手づくり

農泊に関わる人を増やすための取組みも行っている。農泊セミナーを市内で開催し、農泊とは何か、食農体験の大切さ、宿泊者を受け入れるためにはどのようにしたらよいかなどオリジナルの農泊マニュアルを用いて、100人を超えるセミナー参加者に説明を行った。また食農体験を提供する人向けには、1泊2日の食農体験ソムリエ研修を行い、食育の大切さや体験を提供するうえでの注意点などを講習し、研修修了者には食農体験ソムリエの認証を与えている。

さらには同法人が経営する食農体験ファー

(注1)詳細は尾中謙治(2018)「イラストを活用した経営理念の実現—伊豆沼農産の事例—」『農中総研 調査と情報』11月号参照。

(注2)小麦粉を水で練って作った生地をゆでたもの。



写真2 お母さんたちが作る自家製漬物(伊豆沼農産提供)

ムの農園に農家を呼んで、体験者に農作業のレクチャーをしてもらうなど交流の機会を設けている。

4 誘客に向けた取組み

先のような地域内での機運醸成だけでなく、誘客に向けて、都内に住む外国人対象のモニターツアーを実施し、体験内容の改善を試みたり、市が主催する海外の旅行会社との商談会にも参加している。

さらに隣接する市町のグリーン・ツーリズムに取り組む4つの団体と連携し、17年に「みこめっぼらむら三米原村観光協会」を立ち上げて、情報交換や体験者の受入れの協力、海・山・里といったそれぞれの地域資源を生かした観光客の周遊促進を検討するなど、広域性を発揮した誘客にも取り組んでいる。

5 持続的な農泊推進に向けて

伊豆沼農産は、以上のような様々な取組みを展開しているが、持続的な農泊推進に向けては、地域の人を楽しみながらこれに関わることを第一に考えている。そのためにも、常に教わる姿勢で地域の人々の思いや考えを聞き、地域の様々な人と関わり合いながら、次にどのようなことができるのかを模索しており、こうした地域の人とのやりとりが魅力ある農泊の体験提供における源泉となっている。

(さとう さき)